

## 袂 別 の 賦—Byron

楠 本 哲 夫

激動の詩人として終始した Byron の心に去来した pathos 哀感は 数多くの惜別の詩を生んだ。叛逆、自由、解放を叫び続けた Byron の 生涯は 虚々実々 多くの矛盾を孕みつつ 大きく揺れ動いた、荒れた。旋風がスパイラルな線を描いた。しかし—— Byron 卿の欣求したのは つねに、自分の魂をしばし 安らかに淀泊させる、Haven 憩いの港 であったのだろう。

18世紀、19世紀にかけての動乱の時代が、詩人の責任を激しく追求したとき、詩人は 革命者であらねばならぬ という強い自覚と誇りに炎えた 若き傑出した詩人群の陣頭に立って 悪魔派 Satanic school を指揮した Byron であった。

しかし——

嵐の中に つねに、ひとときの憩いを求めて 港へと逃避したいところ——それが Byron の pathos であり、流浪の身を、つねに海に見える館にすみ、冥想のひとときをなによりも愛した心であり、その pathos が 数多くの賦をよませたのである。

Byron は 大きなロマンを求めて つかの間の 生涯をつっ走った、ロマン主義時代を象徴する詩人だった。

その、うたわれた数多くの惜別の情を、類型的回想詩として探ることが 本稿のテーマである。

ロマンとは 何だろう。 人間は 所詮、ロマンを求めて 生涯を走る あわれな ドンキホーテ である。———としても 無限にひろがりゆく夢がある。その夢を追ふのであろう。あるときは 七色の虹となりて 蒼穹に懸<sup>か</sup>かり、あるときは、蜃気楼として 夢幻をよぶ。

詩人の夢は無限にふくらむ。ロマン派詩人の想像力は、あるときは 神との 帰一を求めた。

William Blake, 1757-1827 は  
The Marriage of Heaven and Hell ——  
天国と地獄 との結婚 —1790— の中で

“Thus men forgot that All deities reside in the human hearts”

「かくして人々は すべての神々が人間の心の中に住まうという事実を忘れた」と書いて、 18C 理神論に対して 反逆の声を放った。

Percy Bysshe Shelley, 1792-1822 は一つの generation を経て、  
A Defence of Poetry, 詩の弁護 1840 (出版) (執筆は1821年)——において

“All the authors of revolutions in opinion are not only necessarily poets as they are inventors, nor even as their words unveil the permanent analogy of things by images which participate in the life of truth; but as their periods are harmonious and rhythmical and contain in themselves the elements of verse; being the echo of the eternal music”.

「思想革命を敢行する人々を詩人というのはその人々が革新者であり、真理の

生命にかがやくイメージによって 現象間に存在する永久的類似をその言葉で明あきらかにするばかりでなく、その美しい表現には調和とリズムがあり、詩の要素を含んでおり、いわば、永遠の音楽をこだましているからである」 とのべた。

詩人は先駆した詩人の夢を破り、永遠を翔けて、自己主張を続ける。既存の主義主張を脱却して、のりこえて 詩人は 翔ける。

これが 人の世を彩る華麗いろどなロマンを濃く描いてゆく。

Blake は ‘天国と地獄との結婚’ の中で 人間の神性を暗示し、詩的想像力を—— その創造性ゆえに——神性 という言葉で表現し、強調した。

18世紀の理神論によって——その基調にあった18世紀的科学思想によって—— 詩人の、詩的想像力は危機に立たされていたとき、新しき時代の詩人は、この詩的想像力を 恢復しなければならなかった。

叛逆者としての態勢で立ち向わねばならぬ問題があった。そして それは また 別の一面にもあった。

理神論という一般思想の上で、詩人がみづからの詩的想像力を、その偉力を確信しようとしたとき、 詩人にそれだけの自信を与えるものは 果して 何だったのだろうか。

Blake の詩人像に対して、Shelley の詩人像は 理想主義に走っているが——先駆者の思想を念頭におきながらも—— はっきりと、 自己の確信による断定的所信を述べている。——

‘詩とは 革くわ新しん家かとしての個々こごの人間にんげんの営いみ、である。それ以外には ありようがない。

思想革命を敢行する人々と、詩人とを、Shelley は同一レベルにおいて考える。そこに、Shelley の 自分への過信と異常性 は——それは 誰しも感ずるところだろうが——まさに、新しい時代の 新しい詩人の、——偉大な、使命感に燃えた詩人の、—— 危機感と、自己への信頼感を意味したものに他ならなかったのである。

新しい時代の偉大な詩人の、この烈々たる自己への、個々への、信頼感こそ、19世紀、イギリス、ロマン詩の、必須の成立条件であった。ゆえに、時代的に、英国ロマン詩の豪華絢爛たる開花は、近代ヨーロッパの必然的産物であった。

詩人は———頼るべきのは 自分の想像力のみである。 想像力によって描き出された 幻像やビジョンをうたうことによって個性的 オリジナルな作品を創造することである。

ロマン派の詩人たちは、 生命力を中心とした理想主義を唯一の源泉として、派生した一連の対立物を内容として、想像力を根本的力として駆使し、調和して 一連の作品を創造した。

John Keats 1795-1821 は ギリシアの壺を見て、美と真の同一性を強調して

‘想像力が美として捉えたものは真である’ と述べた。

美と真を同時に考えることができるならばその想像力は 明らかにロマンティックな想像力であり、それから創造される詩作品は、Shelley のことばをかりるならば

‘一篇の詩は 不変の真実として描かれた 生のイメージ そのものである’。

そして、このような想像力の所有者は、<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>人間の神性 human divinity をもつものであろう。

しかし——

19世紀、初頭のロマン派詩人たちの、想像力に対する信頼感には、当然のことながら、すでに危機感がはらまれていた。

20世紀の現代、個人の能力に 不信を抱くとき、想像力の必要は当然これを認めるとしても、その限界は 否定できぬ。

とまれ——

詩人の夢が、ロマンが、みづからの中に human divinity を自覚し、革新家を強く意識させたことは、その功績を強く讃えねばならないだろう。

かくて——19世紀、初頭 Byron, Shelley, Keats の Satanic School による豪華絢爛たる 英国第2期ロマン派時代が開花したのである。

George Gordon, Lord Byron, 1788-1824 は ロマン的な パラドックスを示し続けた詩人であった。名門貴族出身としての 強い誇りに生き しかも革新的思想をつねに行動にうつしながら 力強く唄いつづけた。

19世紀、初頭、かくして、英国詩界に、澎湃として湧き起ったロマンチズムが、新風を渴望した時代背景を母胎として 颯爽として登場した 熱血詩人、叛逆詩人、行動詩人 Byron 卿 であった。

当時の詩風にうたい継がれた 冷やかな 哲理と冥想的傾向に人心は倦いた。そして人々は神よりも 血の通う人間の喜怒哀楽の露わな<sup>あら</sup>激情を望んだ。口には出さずとも、そう感じ そのような詩人の出現をのぞみ そのような詩を<sup>うた</sup>憧れた。

the Lake poets 湖畔詩人群のうたい継いだものが もはや たいくつな<sup>にようぜつ</sup>饒舌にきこえていた。

人々は いま彼らの心に変化を投げかけてくれることのできるうたを渴望していた。変化を与えてくれるうたならば ちょっぴり不道德なものであれ、ちょっぴり無神論であろうと 彼らにとって、むしろ さわやかな一服の清涼剤となったのである。

美德と宗教と靈魂の問題が あまりにも多く うたわれすぎたために 大衆は これに飽食した。 かくて——

the Satanic School ‘悪魔派’ がうたい始めたとき the Lake School は全く、大衆の興味関心を失ってしまった。

かくて Byron の Cynical な すばらしい唄声が 人々の心に しみいるごとく Sweet な メロディ旋律を 奏でていった。

力強い魂は、爆発の核より、必ず 炸裂するであろう。 繊細<sup>せんさい</sup>な心は 傷つき易い。

Byron の心は 繊細にして 且つ 力強く、だが 絶えず 揺れていた。

Byron が Annabella の中に 揺らぎない、不動の影響力を看た と考えたのは 当然のことだったのであろう。

‘Melodies’の流浪の、勇しい唄に混って、より多くの、郷愁的旋律をうたっているのに気づくのであるが、つまり——

完全無欠の、高嶺の花の如き、理想の女性をテーマとした

‘She walks in beauty’

I.

She walks in Beauty, like the night  
Of cloudless climes and starry skies;  
And all that's best of dark and bright  
Meet in her aspect and her eyes:  
Thus mellowed to that tender light  
Which Heaven to gaudy day denies.

II.

One shade the more, one ray the less,  
Had half impaired the nameless grace  
Which waves in every raven tress,  
Or softly lightens o'er her face;  
Where thoughts serenely sweet express,  
How pure, how dear their dwelling-place.

III.

And on that cheek, and o'er that brow,  
So soft, so calm, yet eloquent,  
The smiles that win the tints that glow,

But tell of days in goodness spent,  
A mind at peace with all below,  
A heart whose love is innocent!

June 12, 1814.

‘かのひとは美しく歩む’

1. かのひとは美しく ゆく 夜のごとく

雲影のなき郷 星空の。

影と光の 粋をあつめて

その高貴なる 瞳と容姿に。

かくて とけゆく やさしき光

眩しき白昼は 神あたへざる。

2. 影 濃くなりゆきて 光はうすれ

そこなわれゆく 妙なる<sup>みや</sup>雅び

そは房なせる 黒髪に揺れ

やさしく照す かのひとの顔

そこに想いは あまく<sup>しづ</sup>沈透きて

浄らに いとしく いこう ところ

3. やさしき頬に しづかな<sup>ぬか</sup>額に

しるく うかべる その微笑みは

<sup>あ</sup>吾を惹き またも <sup>も</sup>炎ゆる そのいろ

幸 多かりし あの日をつけて

やすらぐところに 秘める 胸うち

その純愛の ああ <sup>けが</sup>穢れなき

(試訳)

1814. 6. 12



the Iphigenia をテーマとした

JEPHTHA'S DAUGHTER.

I.

SINCE our Country, our God—Oh, my Sire!  
Demand that thy Daughter expire;  
Since thy triumph was bought by thy vow—  
Strike the bosom that's bared for thee now!

II.

And the voice of my mourning is o'er,  
And the mountains behold me no more:  
If the hand that I love lay me low,  
There cannot be pain in the blow!

III.

And of this, oh my Father! be sure—  
That the blood of thy child is as pure  
As the blessing I beg ere it flow,  
And the last thought that soothes me below.

IV.

Though the virgins of Salem lament,  
Be the judge and the hero unbent!  
I have won the great battle for thee,  
And my Father and Country are free!

V.

When this blood of thy giving hath gushed,  
When the voice that thou lovest is hushed,  
Let my memory still be thy pride,  
And forget not I smiled as I died!

エフタの娘

1. われらの国が われらの神が——ああ 父上！  
燔祭の<sup>いけにえ</sup>贄として あなたの娘を もとめた  
その誓いによって あなたの勝利は<sup>あがな</sup>購われた  
さあ、あなたの為<sup>あら</sup>に露わにされた 私の胸を刺し給え——
2. わたしのなげきのこえは もう終り  
山山が わたしをみつめることも ないのです  
わたしが愛したその御手で 私がうち倒されるなら  
その一げきに なんの苦痛が ありましょう！
3. ああ 父上！ わたしのおもいを信じ給え——  
あなたの娘の血は<sup>きよ</sup>浄らかです  
流れでる前に わたしの<sup>ねが</sup>希った 祝福のごとく  
わたしを慰めた この世の最後の思いのごとく
4. エルサレムの処女たちは 歎くとも  
土師は 英雄は 不屈であれ！  
わたしは 偉大な戦勝をかちとった、父上のため  
ゆえに 父上に 祖国に 自由 あれ
5. あなたの生んだ娘の血が ほとばしるとき

あなたの最後の娘の聲が しづもるとき  
 わたしへの思いが なおも あなたの誇りであれ  
 忘れ給うなわたしが微笑んでいたのを 息たゆるそのときも

(試訳)

涙と微笑の間をゆききする the ewig weib をテーマとする

I SAW THEE WEEP.

I.

I SAW thee weep—the big bright tear  
 Came o'er that eye of blue;  
 And then, methought, it did appear  
 A violet dropping dew:  
 I saw thee smile—the sapphire's blaze  
 Beside thee ceased to shine;  
 It could not match the living rays  
 That filled that glance of thine.

II.

As clouds from yonder sun receive  
 A deep and mellow dye,  
 Which scarce the shade of coming eve  
 Can banish from the sky,  
 Those smiles unto the moodiest mind  
 Their own pure joy impart;  
 Their sunshine leaves a glow behind  
 That lightens o'er the heart.

ぼくはあなたが泣くのを見た

1. ぼくは あなたが泣くのを見た——大粒の光る涙が  
碧い目から 溢れでるのを  
そのとき ぼくには思へた その涙が  
すみれ色の <sup>したた</sup>滴りおちる 露の玉に。  
ぼくは あなたが笑うのを見た——サファイアの輝きも  
あなたのかたわらで きらめきは褪せた  
あなたの一べつに みちる  
その生きた光には かなうべくもなくして

2. 雲 かなたの日輪をうけ  
濃き ゆたけき 色に染まり  
せまりくる <sup>ゆうべ</sup>夕の影も  
天空から それを 消しがたいとき  
しづめる心に その微笑<sup>ほくえみ</sup>が  
その浄らなる <sup>よろこび</sup>歓を 贈る  
明るい輝きは 残光となりて  
わが胸うちを 明るくてらす  
(試訳)

この詩は いまだ 未知の間柄にあった頃の Annabella へ Byron が 投じた 理想の女性としての恋情、 あこがれ をうたったのである。

この総明な、初々しい 20才の女性は、 Seaham の Durham Home で このシーズンを過すため ロンドンへ やってきていた。 従姉の Caroline Lamb の主催した ダンスの、早朝 練習会で、 Byron は初めて 彼女にあったとき その高貴な 姿が この世ならぬものとして Byron の心を惹きつけてしまった。

Annabella Milbanke の、身長に申し分のない姿態、亜麻色の髪、リンゴ色の頬、知的なひたい、真剣な表情、そのすべてが——透けてみえる<sup>けい</sup>輕羅を身にまとう官能的美女の魅惑的ワルツよりも、このときの Byron のムードにとっては、より、好ましく——つつましく、理想美として 焼きついてしまった。

結局は、Annabella が Byron にとって 理想の女性ではなく、marriage—separation— exile の 悲運を背負うべく 彼を決定づけた heroine 主役を演じたとしても、その責を Annabella に帰することはできない。

短かった一年の結婚生活において、Annabella は 献身的に Byron に尽した。その情熱もすっかり もえつきてしまった。

Byron の最後を みとった 忠僕 Fletcher は しみじみと 述懐した。

“Lady Byron ほど、Byron を御するに不器用だった 女性は いなかった”と。

虚のバイロン！ 真のバイロン！

それを看破り得なかった Annabella!

抜群のアナベラの数学をもってしても、解き得なかった Byron の描いた複雑な線！

Byron の心は たえず 激しく、揺れ 動いていた！ Byron は、たえず揺れる心を、揺らぎない、安定した、不動心へと落着かせることが 決してできなかったのであろう。

Byron は、有名な (famous いや notorious な)

‘Fare thee well! and if for ever,...’ (1816, 3, 17) の中で, Annabella のみならず, 彼の生涯の, 一人の Iphigenia figure イフィゲニア的人物へ 託した希望への訣別をも告げている。

POEMS OF THE SEPARATION. <sup>1</sup>

FARE THEE WELL.

“Alas! they had been friends in youth;  
But whispering tongues can poison truth:  
And Constancy lives in realms above;  
And Life is thorny; and youth is vain:  
And to be wroth with one we love,  
Doth work like madness in the brain;

\*                      \*                      \*                      \*

<sup>1</sup> [Early in March 1816 a deed of separation between Lord Byron and his wife was drawn up and signed. *Fare Thee Well* (March 18), and *A Sketch* (March 29), which had been printed for distribution among friends, were published, without Byron’s knowledge or assent, in the *Champion*, Sunday, April 14, and in the course of the ensuing week the two poems appeared either singly or together in the *Sun*, the *Courier*, the *Times*, and other London journals. Hence the publicity and wide diffusion of the scandal arising from the quarrel and separation.]

But never either found another  
To free the hollow heart from paining—  
They stood aloof, the scars remaining,  
Like cliffs which had been rent asunder;

A dreary sea now flows between,  
But neither heat, nor frost, nor thunder,  
Shall wholly do away, I ween,  
The marks of that which once hath been”.

—COLERIDGE'S *Christabel*.

FARE thee well! and if for ever,  
Still for ever, fare *thee well*:  
Even though unforgiving, never  
’Gainst thee shall my heart rebel.  
Would that breast were bared before thee  
Where thy head so oft hath lain,  
While that placid sleep came o’er thee  
Which thou ne’er canst know again:  
Would that breast, by thee glanced over,  
Every inmost thought could show!  
Then thou would’st at last discover  
’Twas not well to spurn it so.  
Though the world for this commend thee—  
Though it smile upon the blow,  
Even its praises must offend thee,  
Founded on another’s woe:  
Though my many faults defaced me,  
Could no other arm be found,  
Than the one which once embraced me,  
To inflict a cureless wound?  
Yet, oh yet, thyself deceive not—  
Love may sink by slow decay,

But by sudden wrench, believe not  
Hearts can thus be torn away:  
Still thine own life retaineth—  
Still must mine, though bleeding, beat;  
And the undying thought which paineth  
Is—that we no more may meet.  
These are words of deeper sorrow  
Than the wail above the dead;  
Both shall live—but every morrow  
Wake us from a widowed bed.  
And when thou would'st solace gather—  
When our child's first accents flow—  
Wilt thou teach her to say "Father!"  
Though his care she must forego?  
When her little hands shall press thee—  
When her lip to thine is pressed—  
Think of him whose prayer shall bless thee—  
Think of him thy love *had* blessed!  
Should her lineaments resemble  
Those thou never more may'st see,  
Then thy heart will softly tremble  
With a pulse yet true to me.  
All my faults perchance thou knowest  
All my madness—none can know;  
All my hopes—where'er thou goest—  
Wither—yet with *thee* they go.  
Every feeling hath been shaken;  
Pride—which not a world could bow—



Bows to thee—by thee forsaken,  
 Even my soul forsakes me now.  
 But'tis done—all words are idle—  
 Words from me are vainer still;  
 But the thoughts we cannot bridle  
 Force their way without the will.  
 Fare thee well! thus disunited—  
 Torn from every nearer tie—  
 Seared in heart—and lone—and blighted—  
 More than this I scarce can die.

[First draft, *March* 18, 1816.

First printed as published, April 4, 1816.]

さようなら 永遠に

1. さようなら 永遠に  
 永遠に さらば  
 ぼくのころは おまえを赦さずとも  
 おまえに 背くことはない
  
2. あゝ ぼくの胸が おまえのまえて 露はにされたら！  
 おまえの頭が いつも そこにおかれていたのに  
 清澄な ねむりに おまえが襲われたとき  
 だが おまえには それはふたゝび味えぬこと
  
3. おまえが ちらっとみたとき このぼくの胸が  
 心の奥を 顕<sup>あき</sup>らかにすることができていたら  
 おまえは ついには 知りえただろうに  
 ぼくの胸をはねつけたのは よくなかったのだと

4. 世間は このことで おまえを 讃え——  
ぼくのうけた打撃に ほほえむ だろうが  
その賞めことばは おまえの気に障るだろう  
それは ぼくのいたみの上になげられたものゆえに
5. あまたのぼくの瑕庇ゆえに ぼくの姿は醜くされたが  
かってぼくを抱きしめた おまえの腕よりほかに  
どんな腕が あるというのか  
癒<sup>いや</sup>しがたい深傷<sup>ふかで</sup>を ぼくに負わせたけれども
6. だが ああ しかし 自分を欺いてはならぬ——  
愛が衰退し おもむろに 終着することはあっても  
ふたりの情<sup>こころ</sup>が かくも ねじられ  
忽然と ひき裂れたのは 信じられない
7. それでも おまえの人生を おまえは 続ける  
ぼくも ぼくの人生を 切り開かねばならぬ 出血しながら  
しかし 痛む想の 消えることはないのだ  
——ふたりが ふたたび 会うことはないという
8. それは より深い悲しみを秘める ことば  
黄泉に旅立つ者へとたむける 号泣よりもなお  
ふたりは 生きねばならぬ——だが朝はいつも  
ひとり身の 臥<sup>ふしど</sup>処より目覚める それぞれに
9. そして おまえが 慰みをもとめるとき——  
ぼくたちの愛娘<sup>と</sup>が はじめて語りかけるとき  
おまえは ‘父’ と呼びかけることを教へるのか

その娘には 父の愛はうけられるのに

10. もみじの如き その掌<sup>て</sup>をおまえにおしえてるとき  
 そのかわゆき唇<sup>くち</sup>を おまえの唇<sup>くち</sup>に おしあてるとき  
 思いおこすのだ その娘の父の祈りは おまえの祝福<sup>ぬ</sup>を希<sup>ね</sup>ぐことを  
 おまえの愛が かつて祝福した その娘の父のことを！
11. その娘の顔だちが もし似ているならば  
 おまえが もうふたゝび会うことはない ぼくの顔に  
 そのとき おまえの心臓が しづかにふるえるだろう  
 ぼくを焦<sup>と</sup>がれた あの脈膊<sup>うた</sup>を鼓動<sup>うた</sup>えて
12. 瑕疵<sup>きず</sup>だらけの ぼくのすべてを おまえは知る  
 だが ぼくの狂気の所業のすべては——だれにもわからぬ  
 ぼくの希望<sup>のぞみ</sup>のすべては——おまえがどこえゆこうと  
 萎<sup>しほ</sup>みゆくのだ——だが それは おまえとともに歩むのだ
13. すべての思いは かき乱されて  
 誇りは——世に屈することのなかった——  
 おまえに屈した——おまえに見捨てられたゆえ  
 いま ぼくの魂ですら ぼくをみすててしまった
14. だが もう終ってしまった——すべてのことばは空しいだけ  
 ぼくのすべてのことばは もっと空しい  
 だが抑ええない かずかずのおもいは  
 意志とはうらはらに しゃにむに 押しよせてくる
15. さようなら！ かくて はなればなれに——  
 より身近かなちぎりは すべて裂かれて——

心は菱え——わびしく——枯れて  
かくて ぼくは <sup>うつせみ</sup>空蟬の身に ひとしい

(試訳) 1816. 4. 4.

Annabella によせた想いへの絶望と憤怒を unworthily に さらに有名 (famous いや notorious) となった ‘A Sketch’ の中で唄っているが、これは

---

Annabella (Lady Byron) に かしづいた Mrs. Clerment —— Annabella の生家、Milbanke 家より、結婚生活中、Annabella の Maid として 派遣され 身の回りの世話をした女性——に対して 苦々しい気持を、冷笑を、浴びせかけている。 というのも、彼女が彼の妻 Annabella に、Byron の気持に背くよう、たきつけたのではないかと 誤解したためだったのであろう。

#### A SKETCH. <sup>1</sup>

“Honest—honest Iago!

If that thou be’st a devil, I cannot kill thee”.

—SHAKESPEARE.

BONE in the garret, in the kitchen bred,  
Promoted thence to deck her mistress’ head;  
Next—for some gracious service unexpressed,  
And from its wages only to be guessed—  
Raised from the toilet to the table, —where  
Her wondering betters wait behind her chair.  
With eye unmoved, and forehead unabashed,  
She dines from off the plate the lately washed.  
Quick with the tale, and ready with the lie,  
The genial confidante and general spy—

Who could, ye gods! her next employment guess—  
 An only infant's earliest governess!  
 She taught the child to read, and taught so well,  
 That she herself, by teaching, learned to spell.  
 An adept next in penmanship she grows,  
 As many a nameless slander deftly shows:

<sup>1</sup> [The original of *A Sketch* was a Mrs Clermont, the daughter of a respectable tradesman, who had been employed by Lady Byron's mother, at first as lady's maid, and afterwards as nursery-governess to her only child. Byron was led to believe that she had made mischief, and was, in fact, the cause of the separation, by a statement (perhaps shatements), of his valet's wife, Mrs Fletcher. There is reason to believe that he was misinformed and mistaken.]

スケッチ—— Mrs. Clermont 改題

屋根裏で生れ 台所で育つ  
 奥様の化粧係として 出世し  
 次には——恵まれて 異例に抜擢され  
 そして まあまあといった 給金のゆえに  
 化粧係から 食卓係へとばってきされた——  
 そこには 目を見はるような幸運が用意されていた  
 目をすえて <sup>ひたい</sup>額は 気おくれの色を見せることなく  
 彼女は 洗いたての皿から 食事し  
 きびきびした口調で <sup>そらごと</sup>嘘言がとび出し  
 心からの 腹心となり 全面的スパイ役をつとめた  
 汝 神々よ 彼女の次の大役が 誰に測りえたらう——  
 それは 一人娘の幼児養育係への抜擢だった！

彼女は娘によみかき を教えた そしてたくみに  
だから 彼女も教へることで みづから学んだ  
それから 名筆家となり  
匿名での 中傷的な言辞を たくみに <sup>しやべ</sup>喋りたてた  
(試訳)

これらの 二つの詩は どちらも 世間を騒がせたが、 Byron の絶えず  
激しく 揺れ動いた感情の不安定な起伏を如実に物語っている。

Byron の 感情的激変は Annabella から、姉 Augusta ——幼きころからの、  
あの、 イフゲニアの人物であった——へと 移っていった。

Augusta と Byron との関係、 Dorothy と Wordsworth との関係は、——近  
親相姦を暗示する点までも——奇しくも 似ているのだが、 それ自体、主  
要な ロマン的主題となっている。

これが Manfred の主要動機である、‘All nameless’ guilt なのであり、これ  
ら過渡期の叙情詩の中に、 Wordsworth をして、

‘She gave me eyes, she gave me ears’

とうたわせ、 Byron をして ‘Stanza to Augusta’ をうたわせた、 その関係、  
やさしさ、そして 理解の、 Egeria <sup>(1)</sup> の面を 実に 我々は ききとるこ  
とができるであろう。

註 (1) エゲリア。(ローマ伝説)

ローマ王 Numa に助言、指導した女神。

STANZAS TO AUGUSTA.

I.

THOUGH the day of my Destiny's over,  
 And the star of my Fate hath declined,  
 Thy soft heart refused to discover  
 The faults which so many could find;  
 Though thy Soul with my grief was acquainted,  
 It shrunk not to share it with me,  
 And the Love which my Spirit hath painted  
 It never hath found but in *Thee*.

II.

Then when Nature around me is smiling,  
 The last smile which answers to mine,  
 I do not believe it beguiling,  
 Because it reminds me of thine;  
 And when winds are at war with the ocean,  
 As the breasts I believed in with me,  
 If their billows excite an emotion,  
 It is that they bear me from *Thee*.

III.

Though the rock of my last Hope is shivered,  
 And its fragments are sunk in the wave,  
 Though I feel that my soul is delivered  
 To Pain—it shall not be its slave.  
 There is many a pang to pursue me:  
 They may crush, but they shall not contemn—

They may torture, but shall not subdue me—  
'Tis of *Thee* that I think—not of them.

IV.

Though human thou didst not deceive me,  
    Though woman, thou didst not forsake,  
Though loved, thou forborest to grieve me,  
    Though slandered, thou never couldst shake,—  
Though trusted, thou didst not disclaim me,  
    Though parted, it was not to fly,  
Though watchful, 'twas not to defame me,  
    Nor, mute, that the world might belie.

V.

Yet I blame not the World, nor despise it,  
    Nor the war of the many with one;  
If my Soul was not fitted to prize it,  
    'Twas folly not sooner to shun:  
And if dearly that error hath cost me,  
    And more than I once could foresee,  
I have found that, whatever it lost me,  
    It could not deprive me of *Thee*.

VI.

From the wreck of the past, which hath perished,  
    Thus much I at least may recall,  
It hath taught me that what I most cherished  
    Deserved to be dearest of all:



In the Desert a fountain is springing,  
 In the wide waste there still is a tree,  
 And a bird in the solitude singing,  
 Which speaks to my spirit of *Thee*.

July 24, 1816.

[First published, *Prisoner of Chillon*, etc. 1816.]

オーガスタによせる賦

1. ぼくの運命の日は終り

ぼくの兇運の星は傾いたが  
 姉上のやさしい心は 見ることを拒んだ  
 世間の多くが責めたてた ぼくの<sup>あやまち</sup>罪科を  
 姉上の心は ぼくの悲しみを 知悉<sup>し</sup>っていて  
 その悲しみをわかち合ってくれた ためらうことなく  
 ぼくの心が描いてきた愛は  
 姉上 あなたの心の中にしか 見出しえないのです

2. 自然がぼくの身辺でのみ 微笑む いま

それが ぼくにこたえてくれる最後の微笑みなのだが  
 それだけが 真実<sup>まこと</sup>だと ぼくは信じる  
 なぜなら それはあなたを 想起させるから  
 ぼくの胸のうち さながらに  
 嵐が<sup>うみ</sup>海原に 吼えるとき  
 荒波が 激情をよぶなら  
 それがぼくと姉上を裂<sup>き</sup>きはしないかという怖れなのです

3. ぼくの‘希望’の岩はうち砕かれて

その断片が波まに<sup>しづ</sup>没みゆくとも

ぼくの魂は救はれて 苦しみと変りゆくのだ  
だが 苦痛よ おまえの奴隷として屈することはしないぞ  
ぼくを追う苦痛は<sup>かさ</sup>量なり かつ おもい  
それがぼくを押しつぶそうとしても ぼくは 屈しない  
ぼくを悶えさせても ぼくを服従させることはできぬ——  
ぼくの思いは姉上のこと——苦悶ではないのだから

4. あなたは 人として ぼくを欺くことなく  
女としてぼくを見捨てることなく  
愛されながら ぼくを悲しませることは控え  
ひなんされながら 心を動かすことはなかった  
信じられながら ぼくのことを知らぬとはいはず  
わかれてもそれは ぼくから逃げるためではなかった  
警戒はしても ぼくを傷けることではなく  
黙<sup>もだ</sup>しても 世を欺くためではなかった
5. だが ぼくは世をとがめも けいべつもしない  
ぼく一人に多数が挑む戦 をも。  
ぼくの魂が大切にするにふさわしくないなら  
むしろ避けなかったのが おろかだった  
そしてあやまちの代価がぼくに高価であり  
とうてい ぼくに予見できなかったとしても  
ぼくにはわかるのです 世がぼくから何を奪い去ろうと  
あなただけはぼくから奪い得ない ことを
6. 過去の残骸から それはもう滅びてしまったが  
このことだけは 少なくとも思い起すことができる  
過去はぼくに教へた ぼくに最も大切だったのは

すべての中で最も愛するに値したものだつたと  
 砂漠の中にも泉が こんこんと 湧き出て  
 寂しい荒野の中にも まだ 一本の木が立ち  
 静寂の中に 一羽の小鳥が囁りつつ  
 ぼくの魂に あなたのことを ささやきかける

(試訳) 1816. 7. 24

これは ‘Oh! snatch’d away’ のもつ哀歌<sup>しらべ</sup>の調である。

OH! SNATCHED AWAY IN  
 BEAUTY’S BLOOM. <sup>1</sup>

I.

OH! snatch’d away in Beauty’s bloom,  
 On thee shall press no ponderous tomb;  
 But on thy turf shall roses rear  
 Their leaves, the earliest of the year;  
 And the wild cypress wave in tender gloom:

II.

And oft by yon blue gushing stream  
 Shall Sorrow lean her drooping head,  
 And feed deep thought with many a dream,  
 And lingerring pause and lightly tread;  
 Fond wretch! as if her step disturbed the dead!

III.

Away! we know that tears are vain,  
 That Death nor heeds nor hears distress:

Will this unteach us to complain?

Or make one mourner weep the less?

And thou—who tell'st me to forget—

Thy looks are wan, thine eyes are wet.

[Published in the *Examiner*, April 23, 1815.]

ああ！ 花のさかりに 散りゆきて

1. ああ 花のさかりに 散りゆきて

かるやかに 墓石をおけよ 臥し<sup>ふ</sup>処<sup>ど</sup>には

薔薇 芝土に 育<sup>お</sup>い茂り

芽吹けよ 早春に 葉<sup>は</sup>叢<sup>むら</sup>濃きまで

やさし蔭には いと杉 ゆれむ

2. かなたに<sup>あお</sup>碧く 飛<sup>し</sup>沫<sup>ぶ</sup>く 瀬に

悲しみの女神 うなじ 垂<sup>た</sup>れ

おもいに耽り 夢みつ

たゆたひ 止り 秘めやかにゆく

慈心よ あわれ！ 祈るかに安<sup>お</sup>眠<sup>むり</sup>を

3. 散りゆきし！ 涙は空しと 知る人の

悲しみを知らず 無情な 死神

吾<sup>あ</sup>が悲しみの 消ゆる日はいつ

歎きのうすれゆくときは いつ 吾<sup>あ</sup>に

忘却を説くきみ 蒼ざめ 瞳は濡れて

(試訳) 1815. 4. 23

‘Stanza to Augusta’ の the second set は 最初ほどの出来栄えではない。  
軽快な Anapest 格は、このテーマにふさわしくない。

STANZAS TO AUGUSTA. <sup>1</sup>

WHEN all around grew drear and dark,  
     And Reason half withheld her ray—  
 And Hope but shed a dying spark  
     Which more miseld my lonely way;  
 In that deep midnight of the mind,  
     And that internal strife of heart,  
 When dreading to be deemed too kind,  
     The weak despair—the cold depart;  
 when Fortune changed—and Love fled far,  
     And Hatred's shafts flew thick and fast,  
 Thou wert the solitary star  
     Which rose and set not to the last.  
 Oh! blest be thine unbroken light!  
     That watched me as a Seraph's eye,  
 And stood between me and the night,  
     For ever shining sweetly nigh.  
 And when the cloud upon us came,  
     Which strove to blacken o'er thy ray—  
 Then purer spread its gentle flame,  
     And dashed the darkness all away.  
 Still may thy Spirit dwell on mine,  
     And teach it what to brave or brook—  
 There's more in one soft word of thine  
     Than in the world's defied rebuke.  
 Thou stood'st, as stands a lovely tree,  
     That still unbroke, though gently bent,

Still waves with fond fidelity  
    Its boughs above a monument.  
The winds might rend—the skies might pour,  
    But there thou wert—and still wouldst be  
Devoted in the stormiest hour  
    To shed thy weeping leaves o'er me.  
But thou and thine shall know no blight,  
    Whatever fate on me may fall;  
For Heaven in sunshine will requite  
    The kind—and thee the most of all.  
Then let the ties of baffled love  
    Be broken—thine will never break;  
Thy heart can feel—but will not move;  
    Thy soul, though soft, will never shake.

<sup>1</sup> [Byron's half-sister, the Honourable Augusta Byron (1783–1851), was the daughter of Captain John Byron by his first wife, Amelia D'Arcy, Baroness Conyers in her own right, the divorced wife of Francis, Marquis of Carmarthen, afterwards fifth Duke of Leeds. She married (1807) her first cousin, Colonel George Leigh of the Tenth Dragoons, son of General Charles Leigh, by Frances daughter of the Admiral, the Honourable John Byron.]

And these, when all was lost beside,  
    Were found and still are fixed in thee;—  
And bearing still a breast so tried,  
    Earth is no desert—ev'n to me.

[First published, *Poems*, 1816.]

オーガスタによせる賦

1. 吾<sup>あ</sup>をめぐるすべては 暗く うらぶれて  
 理性の光り なかば うせ  
 寂しきみちを あやまり導き  
 ひとすぢの希望も 消え<sup>ゆ</sup>なんと<sup>ら</sup>して明滅ぐ
  
2. ぬばたまの 暗々と 心の中で  
 相うつ<sup>むなうち</sup>胸裡<sup>かつとう</sup>の 葛藤<sup>かつとう</sup>の中で  
 あまりにも やさしさと 思われるを怖れ  
 弱きものは 絶望し—— 冷きものは去りゆく
  
3. 星遷<sup>うつ</sup>り——わが愛は 遠く去り  
 憎悪の征矢の 吾<sup>あ</sup>にしげきとき  
 きらめく一つ星 汝<sup>なれ</sup>のみは  
 高きにありて 消ゆることなき
  
4. ああ 祝福されてあれ 汝の光は消えず  
 天女の瞳 吾<sup>あ</sup>を見守りて  
 夜とわれとの 間<sup>あはれ</sup>にありて  
 永へに照す やさしく吾を
  
5. われらの上に 雲たれこめて  
 汝の光を 冥<sup>くら</sup>くするとき  
 浄<sup>きよ</sup>らに やさしき 光茫<sup>きやうぼう</sup>をひろげ  
 闇は たちまち 霧散してゆく
  
6. 汝の心 なおも 吾が上に止り

告げよ<sup>あ</sup>吾に 戦のみち 耐ゆるみち  
汝のやさしき<sup>こと</sup>ひと言は より強く  
吾<sup>あ</sup>によせてくる 世の非難<sup>とがめ</sup>より

7. うるわしき樹よ 汝は立つ  
折れることなく つましくかがみ  
なおも揺<sup>ゆ</sup>らしつ 操<sup>みきを</sup> きびしく  
その大枝を 碑の上に
8. 嵐は荒<sup>すさ</sup>び 豪雨注ぐとも  
汝 そこに立ち—— 烈しき荒天の刻  
吾が身<sup>かば</sup>を庇い 慟哭<sup>どうこく</sup>の涙の葉を  
ふり落しつ 汝が身を献げし
9. 汝と汝が樹は 枯れることなし  
吾と運命<sup>さだめ</sup>が 傾きゆくとも  
なぜならば神は やさしきものに  
報いむ——わけても 汝に陽光<sup>ひかり</sup>注ぎて
10. 愛のきずなを 絶ちきらむとするも  
汝の愛は 切れることなし  
多感なる汝 されど不動に  
やさしくあれど 揺<sup>ゆる</sup>がざる汝が魂
11. すべてが碎け 散るときに  
この絆<sup>きづな</sup> 不動に 汝が心<sup>こゝろ</sup>に在り  
試練に耐えた 心をもてば  
砂漠にあらず この世は——吾<sup>あ</sup>にさえ

(試訳)



だが、the “Epistle to Augusta” は1816にかかれ （そのころ、Byron は、もう、大陸に移りすんで、追放者として 流浪の身だったが） Byron の死後 6 年、出版された。

これは、幼き日の回想的モチーフが強く唄われている。

# EPISTLE TO AUGUSTA.

## I.

My Sister! my sweet Sister! if a name  
 Dearer and purer were, it should be thine.  
 Mountains and seas divide us, but I claim  
 Not tears, but tenderness to answer mine:  
 Go where I will, to me thou art the same—  
 A loved regret which I would not resign.  
 There yet are two things in my destiny,—  
 A world to roam through, and a home with thee.

## II.

The first were nothing— had I still the last,  
 It were the haven of my happiness;  
 But other claims and other ties thou hast,  
 And mine is not the wish to make them less.  
 A strange doom is thy father's son's, and past  
 Recalling, as it lies beyond redress;  
 Reversed for him our grandsire's fate of yore,—  
 He had no rest at sea, nor I on shore.

## III.

If my inheritance of storms hath been

In other elements, and on the rocks  
 Of perils, overlooked or unforeseen,  
 I have sustained my share of worldly shocks,  
 The fault was mine; nor do I seek to screen  
 My errors with defensive paradox;  
 I have been cunning in mine overthrow,  
 The careful pilot of my proper woe.

## IV.

Mine were my faults, and mine be their reward.  
 My whole life was a contest, since the day  
 That gave me being, gave me that which marred  
 The gift,— a fate, or will, that walked astray;  
 And I at times have found the struggle, hard,  
 And thought of shaking off my bonds of clay:  
 But now I fain would for a time survive,  
 If but to see what next can well arrive.

<sup>1</sup> [“Admiral Byron was remarkable for never making a voyage without a tempest. He was known to the sailors by the facetious name of ‘Foul-weather Jack’ (or ‘Hardy Byron’).

“‘But, though it were tempest-toss’d,

Still his back could not be lost.

He returned safely from the wreck of the *Wager* (in Anson’s voyage), and many years after circumnavigated the world, as commander of a similar expedition” (Moore). Admiral the Hon. John Byron, (1723-1786), next brother to William, fifth Lord Byron, published his *Narrative*, of his shipwreck in the *Wager*, in 1768.]

オーガスタへの信書

1. 姉上！ 優しい姉上！ もし その名を 呼んで  
より愛しく より浄らかなもの それは姉上の名  
泉が海がぼくらをへだてても ぼくが欲しいのは  
涙でなく ぼくにこたえてくれる優しさなのだ  
どこをさまよっても ぼくにとって渝らない姉上——  
愛の悼みを ぼくは 忘れえない  
ぼくの運命は 二道にわかれ  
さまよいゆく世界 と姉上と共に憩う家
  
2. はじめてのものは無に帰した——だが最後のものは残った  
それは ぼくの幸福の いこう港  
だが姉上には他の要求と他のきづながあるのです  
そしてぼくのはそれを軽減させたい願いではない  
奇しき運命はあなたの父の息子の宿運 そして過去は  
思い起しても 修復しがたいものなのです  
往年のわたしたち祖父の兇運とは だが逆でしたね  
祖父は海上で憩をもたず ぼくには憩がない 岸で
  
3. ぼくの嵐の遺産が もし 別の要素の中に  
そして看のがされていた 未見の危険な岩の上に  
うけつがれていたのであれば  
ぼくは世俗的衝撃の負担に 耐えてきた  
責はぼくにあった そして自己矛盾のことばで  
ぼくの過誤を いんべいしてはならぬ  
ぼくは功妙だった ぼくのでんぶくにおいて  
ぼくの生来の悲しみの注意深い水先案内として

4. ぼくの挫折をわが罪としても かれらの報酬たらしめよ

ぼくの全生涯は斗いだった 生をうけ

傷つきしものを 与へられし日より

その贈りもの——さまよい歩いてきた運命と意志

ときに その斗いを苦しいと思った

そして生れしことの絆を<sup>きづな</sup> 絶ちきろうとも思った

だが今は すすんでつかのまを生きようとも思う

次に何がおこるかを充分に見届けるためであっても

V.

Kingdoms and Empires in my little day

I have outlived, and yet I am not old;

And when I look on this, the petty spray

Of my own years of trouble, which have rolled

Like a wild bay of breakers, melts away:

Something—I know not what—does still uphold

A spirit of slight patience;—not in vain,

Even for its own sake, do we purchase Pain.

VI.

Perhaps the workings of defiance stir

Within me—or, perhaps, a cold despair

Brought on when ills habitually recur,—

Perhaps a kinder clime, or purer air,

(For even to this may change of soul refer,

And with light armour we may learn to bear,)

Have taught me a strange quite, which was not

The chief companion of a calmer lot.

VII.

I feel almost at times as I have felt  
 In happy childhood; trees, and flowers, and brooks,  
 Which do remember me of where I dwelt,  
 Ere my young mind was sacrificed to books,  
 Come as of yore upon me, and can melt  
 My heart with recognition of their looks;  
 And even at moments I could think I see  
 Some living thing to love—but none like thee.

VIII.

Here are the Alpine landscapes which creat  
 A fund for contemplation;—to admire  
 Is a brief feeling of a trivial date;  
 But something worthier do such scenes inspire:  
 Here to be lonely is not desolate,  
 For much I view which I could most desire,  
 And, above all, a Lake I can behold  
 Lovelier, not dearer, than our own of old.

IX.

Oh that thou wert but with me! —but I grow  
 The fool of my own wishes, and forget  
 The solitude which I have vaunted so  
 Has lost its praise in this but one regret;  
 There may be others which I less may show;—  
 I am not of the plaintive mood, and yet

I feel an ebb in my philosophy,  
And the tide rising in my altered eye.

5. 若き日 もろもろの国を さまよひ  
生きのびて まだ 老いたる身ではない  
ふりかえりみて ささやかな水煙よ  
吾が 苦しみの過し方の そは すぎゆきし  
波のくだける荒<sup>ありそ</sup>礎のごと 溶けて流れる  
なにかが——その正体のわからぬまま——まだ支へている  
かすかな忍耐の心を ——空しくはなれて  
それ自身のゆえに ぼくたちは苦<sup>あかな</sup>痛を購うのだ
6. 挑戦の活動が かきたてられるだろう  
ぼくの心の中で——いや 冷えきった絶望感が  
病が いつも 再発するとき 襲いくる——  
たぶん よりやさしい国 より浄らかな空気が  
(というのは 心の変化が これにかかわり  
かるいよろいを身につけることにがまんすることを学ぶかも)  
ぼくに不思議な<sup>しづ</sup>寂けさを 教へた それは  
おだやかな 運命の 主要な 伴侶ではなかった
7. ぼくは折にふれ思う たのしかった子供のころに  
感じたもの 木や 花や 小川を  
それはぼくのすんだところを 思いださせる  
書物を読んで心がさいなまされる 以前のころ  
幼き日がめぐりくれば ぼくの心はとけるだろう  
それらのものを みとめて  
折にふれ 見ることができると思う

愛しうる いきづくものを——だが 姉上ほどの人には会えぬ

8. アルプスの風景がいまひろがりきて創る

冥想の糧を ——讃えることは  
 ささやかな日への つかのまの情<sup>こころ</sup>なのだ  
 さらに価値あるなにかがこの美観をかきたてる  
 ここにいる寂しさは 荒涼ではない  
 ぼくの見たい多くのものが 見えるから  
 そして 格別に 湖がのぞめるから  
 それはぼくたちの昔より もっと美しくもっと愛<sup>いと</sup>しい

9. 湖よ そこにあれ ぼくと離れず だが

愚かなぼくの願いはつり 忘れゆく  
 この静けさを ぼくの自慢の  
 この悔恨のゆえに 自讃のこころも  
 ぼくが見せうる これほどのものはない  
 ぼくは哲学の中で 満ちくる潮を感じず  
 ぼくの変貌した視野の中で 満ちてゆく

X.

I did remind thee of our own dear Lake,<sup>1</sup>  
 By the old Hall which may be mine no more.  
 Leman's is fair; but think not I forsake  
 The sweet remembrance of a dearer shore:  
 Sad havoc Time must with my memory make,  
 Ere that or thou can fade these eyes before;  
 Though, like all things which I have loved, they are  
 Resigned for ever, or divided far.

XI.

The world is all before me; I but ask  
Of Nature that with which she will comply—  
It is but in her Summer's sun to bask,  
To mingle with the quiet of her sky,  
To see her gentle face without a mask,  
And never gaze on it with apathy.  
She was my early friend, and now shall be  
My sister—till I look again on thee.

XII.

I can reduce all feelings but this one,—  
And that I would not; —for at length I see  
Such scenes as those wherein my life begun—  
The earliest—even the only paths for me—  
Had I but sooner learnt the crowd to shun,  
I had been better than I now can be;  
The Passions which have torn me would have slept—  
*I* had not suffered, and *thou* hadst not wept.

XIII.

With false Ambition what had I to do?  
Little with Love, and least of all with Fame;  
And yet they came unsought, and with me grew,  
And made me all which they can make—a Name.  
Yet this was not the end I did pursue;  
Surely I once beheld a nobler aim.  
But all is over—I am one the more



To baffled millions which have gonee before.

XIV.

And for the future, this world's future may  
From me demand but little of my care:  
I have outlived myself by many a day,  
Having survived so many things that were;  
My years have been no slumber, but the prey  
Of ceaseless vigils; for I had the share  
Of life which might have filled a century,  
Before its fourth in time had passed me by.

<sup>1</sup> [For a description of the lake at Newstead, see *Don Juan*, Canto XIII. stanza lvii.]

10. あなたはぼくに懐<sup>なつか</sup>しいぼくらの泉をおもい出させる  
もうぼくのものではなくなった あの古い館<sup>やかた</sup>のそばの  
レマンの湖<sup>うみ</sup>は美しい だが 忘れえない  
もっといとしい岸辺の やさしい 思い出は  
時は流れて想出の中に悲しい恐怖をかもすかも  
これらの眼が その前で あなたの前で色あせてゆく前に  
ぼくが愛したすべてのように そうなのだが  
それらはあきらめられ 遠くへだてられるのだが
11. 世界のすべてがぼくの前にある だがぼくが求めるのはただ  
自然が従うもののみ—— それは  
日光浴をする真夏の太陽  
空の静寂<sup>しじま</sup>の中に とけこむこと

假面をぬいだ自然の温顔を眺めること  
そして敵意もて みつめないこと  
自然は 幼いころのぼくの友 そして今  
ぼくの姉——ふたたび あなたに会へる日まで

12. ぼくは凡ての感情を帰一させることができる——一つの感情以外は  
そしてそれだけはしたくない——なぜなら 遂に ぼくは見たから  
ぼくの生命のはじまった場面を——  
ぼくの生命のはじめ——そしてぼくの歩む一つの道——  
ぼくを避ける群衆をもっと早く知っていたら  
今のぼくより ずっと <sup>しあわせ</sup> 幸 であっただろうに——  
ぼくは苦しまなかつただろうに そしてあなたは泣かなかつただろうに

13. <sup>いつわ</sup> 偽れる野望ゆえに なにをしなければならなかつたのか？  
愛うすく 少なくとも名声に背かれて  
だが愛も名声も 求めずしてやってきて この身に栄えた  
そしてそれらの能うかぎりを ぼくに与えた——栄光の名を  
だが それは ぼくが追い求めたすべてではなかつた  
もっと崇い目的を ぼくは <sup>ねが</sup> 希った たしかに  
なのにすべてが終つた——そして それゆえ孤立したぼくは  
先駆した幾万の ぼくに仇した人々に対して

14. そして未来に この世の未来に  
ぼくらは ぼくの関心の ほんのわづかしが要求しないだろう  
いく日月を ぼくは 生きぬいてきた  
すぎゆきし多くのことに 生きぬいてきた  
わが青春は まどろみにあらず <sup>いけにえ</sup> 犠 だった  
<sup>く</sup> 繰り出される悪の といふのは一世紀をみたしたほどの

いのちの営みをばくはわけもって 生きてきたから  
—— 四半世紀がばくのそばを駆け去ろうとする前に

(試訳)

この詩には 感情の激変、逆行がみられる。結婚の挫折が, Augusta へと、いやさらに、少年時代へと、逆行させ、 いや、さらに、スコットランドへ、生死の流れの分水界へと——父のみを同じくする異母姉の Augusta と彼が結ばれた出生前の状態へと —— 逆行してゆく。

Could I remount the river of my years  
To the first fountain of our smiles and tears,  
I would not trace again the stream of hours  
Between their outworn banks of withered flowers,  
But bid it flow as now—until it glides  
Into the number of the nameless tides.

わが生涯の河を	さかのぼ 逆ることができれば
微笑と 涙の	はじめての泉まで。
ときの流れを	たぐることはすまい、
年経 <sup>ふ</sup> りた枯花の	土手の間で。
今を流れよ！	流れゆき
無名の湖に	注ぎこむまで

(試訳)

この詩行は ‘fragment’ (Diodati, July 1818)に通じるものだが、これは Byron の回顧詩の中では 稀にしか相遇しえない強烈さをもつゆえに Byron に完成してほしかったのだが——死の意味 absence と death の同一視、死者はある種の, Shadowy conscionsness を enjoy する可能性をもつという主題<sup>テーマ</sup>に触れ始めようとしている。

... do they in their silent cities dwell

Each in his incommunicative cell?  
Or have they their own language? and a sense  
Of breathless being? —darkened and intense  
As Midnight in her solitude?...

死者たちは、みな、音のない街の中で  
閉<sup>とぎ</sup>された独房の中で 暮すのか？  
それぞれの言葉をもち、  
息づかぬ者の意識をもつのか？  
暗く、烈しく、寂しき夜鶯の如くに。

(試訳)

この Byron の詩行が、きけるものなら、もっと ききたいものである。しかしこれは、もちろん、Manfred のテーマであり、今、考究すべき 一群の冥想詩のテーマであるはずだ。

‘The starlight of his boyhood’

~to keep the mind  
Deep in its fountain

~こころは  
深き 泉に 沈<sup>しづ</sup>透きて

この強烈な渴望は最初、Childe Harold (III, lxix) に唄われたが、Byron の内省的——いや、それは、intuitive 直観的 とよんだほうが適切かもしれぬが——調<sup>しら</sup>べの核心に存在している。というのは、Byron は、Wordsworth, Coleridge、さらに、Keats のように 内省的詩人ではない。

T. S. Eliot は、かの有名は批評文の中でロマン主義者たちの‘反芻’につい

てのべた。

‘Byron は 反芻したのではない。過去の経験の思い出を、喰いもどしを反芻したのではない。また、‘現実’又は‘真理’の瞥見に基き体系をきづきつつ推論したのではない。

Byron には記憶の資料をくどくど冥想する余地は 残されていないし、現時点のことで あまりにも多忙ゆえに、瞑想の流れではなく、永遠という征失の流れの現時点のことに、あまりにも多忙ゆえに、反芻のいとまはなかったのである。

Byron にとっての問題は、sense data (感覺的資料) の複雑性と、それへの固執であった。つまり Byron は、みづからが水中に沈められて、現実の event の流れによって押し流されてゆく危険をみとめていたのである。ゆれに Byron の冥想的詩とは みづからの存在の内的源泉に みづからを やすらかに 投錨させることに 絶えざる努力を集中した。

Byron が みづからの中心に やすらかに想うことの可能性こそ (the ‘my fountain-mind undisturbed’ of zen story) —— 禅の修行の如く、搖ぎない、わが泉なる心——こそ、Byron の外的な放蕩生活 と 激情発散のすべてを通じて Byron を支えた力だったのである。

‘my fountain-mind undisturbed’ が——— この、ことばの二つの意味において、つまり、錨としての、そして、源泉としての 二つの意味において、—— 飲む、力、平和 の、秘められた泉を支えたのである。

‘A hadith of the Prophet’ の作品も、その適例である。

‘Everything shall return to its origin’. <sup>(2)</sup>

—— ‘すべてのものは、その元のすがたに帰るべし’。——

- 註 (2) A letter to Murray of 24 September 1821 expresses Byron's urge to withdraw his mind to its fountain — keeping its 'feelings like the dead, who know nothing and feel nothing'. And here is where Nature helps: 'As long as I can retain my feeling and my passion for Nature, I can partly & subdue my other passions and resist or endure those of other's (Letter to Isaac Disraeli of 10 June 1822)..

Byron の幼き日を知る人人は、Byron の外遊に同行した人人は、Byron が突如として、不測に興奮している群衆 hot throng から ひとり離れて、何時間も 何時間も、海を見下ろす岩の上で 坐禅をくみ 自らの 心の奥底に深く とび込み それを探險し、蘇生させるべく、それに触れた、彼の性格について 再三再四 のべている。

これと同じムードが 私的日記の中にも きこえてくる。もっとも それは、ここですら、彼の書翰の中に流れる、又、談笑中の会話の中に流れる、あの嘲笑的自己軽視の気配を帯びてはいるが……。

‘僕は 一人でいるときが一番 幸である。という確信はないとしても たしかなことは 僕の愛する女性とでさえ 長い時間同居すれば 必ず あの、僕自身の<sup>ランプ</sup>灯と 雑然とした書斎が恋しくなっている。僕は毎日 一時間は Jackson と、あらゆる窓を開けっ放しておいて、運動のため時間を<sup>き</sup>割いて 僕の中の エーテルの如き部分を 稀薄にして 維持し続けておこうと努めているのだ。疲れが激しいだけ、その日の残りは 僕の精気は かえってより快調となってくる。そして僕の夜は あの 穏やかな、倦怠 と無為を迎える。そして僕にとって このときが最も<sup>ひととき</sup>たのしい一刻なのだ。(1814, 4, 10 付)

‘Hob は詩作し 日記をつけている。僕はじっと みつめ 無為のひとときを過している’。 1810, 5, 5日 Abydos 沖合に Salsette フリゲート艦が淀泊中、Byron は Francis Hodgson 師にかき送っている。

Byron の ‘wei wu wei’ は Wordsworth の ‘wise passiveness’ に 酷似している。いや、さらに Keats の ‘indolence’ に もっと酷似している。Byron の場合、‘indolence’ は ‘speculation’ 即ち reflection とは ちがうのであって、はっきりと区別すべきだ。これは、— B の最初の処女詩集の中で、この canonical ‘hours’ を讃えている—創作的 ‘idleness’ を意味する。

Byron 詩の中では indolence と speculation の両語は はっきりと区別されて 使われているが、indolence は つまり、‘calm nothingness of languor’ ‘metaphysics’ (Byron の気に入る の語で彼の書翰や日記によく見られる) と考えてよいだろう。

‘All passions spent’ のムードが Byron の叙情詩には みなぎっている。

‘All things remount to a fountain,  
though they may flow to an ocean’,

‘万物は所詮 一つの泉へと帰りゆく  
大海へと 注ぎゆくことは あれど’

と ‘Detached Thoughts’ の中でのべている。そして、かくの如くして、Byron の諸の思索の 内面、外的方向への動きは、きちんと要約されてゆく。

もし Thought のこの、最後の一文が、Byron の いわゆる ‘calm nothingness’ の一面を意味するのであれば、それとともに ‘Thought’ が開く ‘speculation’ — すなはち、

‘... I sometimes think that *Man* may be the relic of some higher material being, wrecked in a former world, and degenerated in the hardships and struggle though Chaos into Conformity ... as the Elements become more

inexorable...’

「私は ときに思ふのだが、人は、 ある もっと高等的物質存在の遺物であつたのかもしれない、 それは 前世界において 破壊され、混沌の状態をくぐりぬける 難渋と悶えの中から 帰一へと ————— 諸の要素が不変のものとなったように—————退化したのだ」

という Speculation は Byron の、‘metaphysical’ 的 思索に属する。即ちこのような ‘宇宙から 泉の奥深い心へと引き込むことが Byron の 思索の特色である。 根源、自然、運命を 基盤とする思索こそ、勿論、 彼の、<sup>テーマ</sup> 聖書の中より主題をとった詩劇の主要な要素となっている。

しかし、それらがまた、 多くの、非ドラマ的、非叙情的詩の動機づけとなっている。

これらの中で 最も良き適例として、 有名な、‘Darkness’ を挙げることができよう。

(続 次号へ)

#### 参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge, The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie A. Marchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadio Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂.